心肺蘇生法に神様は必要か？

「それで？」

　結局妖精モドキの性別は不明でだった事によって受けたショックから立ち直った俺は、探しに行こうと部屋を出かけた妖精モドキに話しかける。一体どうしたのか、というような表情で妖精モドキは振り返るが、そりゃあそうだろう。俺は肝心な事を聞いていない。

「その護衛対象は、どんな奴なんだ？」

　それが分からないと、探しようが無いのだ。聞くのは当たり前である。それはこいつも分かっているはずなのだろうが、何故か少し悩む。大方、一般人である俺にペラペラ喋ってしまってもいいのか迷っているのだろう。しかし、それでは困る。

「おい。そいつを探してくれとと頼んだのはそっちだろう？　聞かせてくれないんじゃあ、見つけられない」

　だが――

「いえ……その、教えることは吝かではないのですが、いかんせん、どう言っていいものか……あなたのように、人のような見た目なのは間違いないです」

　どうやら、こいつの語彙力の問題だったらしい。それにしても、『人のような』ときたか。どうやらそいつは、人間ではないみたいだ。

　一瞬、全身銀色の、昔の人が思い浮かべていたような宇宙人の姿が、俺の脳裏に現れる。もしそんなやつなら……と、一瞬背筋が凍ったが、すぐに頭を振ってそのイメージを振り払った。見た目での偏見は良くないよな。俺を蘇生させてくれたんだし、きっといい奴なのだろう。

　よく考えてみれば、『人のような』と言ったんだから、見た目は人間っぽいんだよな。案外、そう身構えるような感じではないのかもしれん。

まぁ何にせよ、こいつのボキャブラリーが不足していたところで、教える気があるのなら、それならそれで問題は無い。必要な情報をこっちから聞けばいいんだからな。

「顔の見た目は、俺みたいなやつか？　出来れば、目元とか、口元とか、そんな所で判断して欲しい」

　『性別』の概念が無いのは、さっきの会話で充分分かったので、取り敢えずそう聞いてみた。すると、妖精モドキは首を振る。一応、俺は女には見えない程度には男らしいという自覚があるので、こいつが首を振ったということは、多分、性別は女だろうと俺は判断する。

　とは言え、念のために質問はしておこう。

「体型はどんなだ？　俺と比べて細いか、それとも太いか？　筋肉の付き方はどんな感じだ？」

「そうですねぇ……あなたに比べれば、細いと思います。筋肉は、服の上からでは分かりませんが、あなたよりは付いているのではないかと……」

　なるほど。細マッチョの美男子って可能性もあるのか。

　何故か湧き上がってきた、ほんの少しの敗北感を無視して、俺は質問を続ける。

「口の回りは？　髭とか生えているか？」

「髭？　いえ、そんなものは無いですね」

「肌の色は？　俺と比べると色黒か、それとも色白か？」

「色白ですね」

「……性別が分からんな。あぁ、そうだ。これ聞くの忘れてた。髪型は？　髪の毛の色は？」

「髪型？　ええっと……色は黒いのは知っていますが、髪型は名前が分からないので何とも……一応、長さはあなたより少し長いくらいですかね。肩のあたりまで伸びています」

「じゃあ、背丈はどうだ？　俺より高いか低いか、どっちだ？」

「同じくらいでしょう」

「目の色は？　俺みたいに黒いか？　それとも別の色か？」

「黒いですね」

「なるほど……」

　ここまでの話を整理すると、どうもこいつの護衛対象は女っぽい。まだ完全に断言は出来ないが、少なくとも可能性は高いだろう。

「服は着ているのか？」

　そう聞くと、こいつは頷いた。どうやら妖精モドキとは違い、見た目は服を着ているけど、実は何も着ていないとか、そんなんじゃないみたいだ。

「見た感じは、ヒラヒラした感じですかね？　少なくとも見た目は、あなたや私よりも目立ちますよ？」

　妖精モドキは、俺の着ている制服を指差して言う。俺は自分の着ている、白いブレザーと灰色のズボンを見つめた。なるほど。こいつより派手か。

　ふと気になって、俺は自分の部屋の本棚からファッション雑誌を引っ張り出して、レディースのページを開いた。もしかすると、そいつが身につけている物に近い服が、ここに載っているのではないかと思ったのだ。

　というか、容姿も含めて、初めからこいつを見せながら聞けば良かったかもしれない。

　モデルさんの写真を見ながら、自分に間抜けさに溜息を吐いた。

「おい、聞こえるか？」

　既に日は落ちて暗くなった空の下、マンションの外に出た俺は、大きめの手さげ鞄に話しかける。正確には、鞄の中にいる妖精モドキに話しかけたのだが。

　護衛対象を探すためにはこいつが必要だが、流石にこいつをそのまま外に連れ出すのはまずい。本人も『あまり人目に触れたくない』と言っていたので、取り敢えず鞄の中に押し込む事にしたのだ。やり方がベタだが気にしない。小さかった故、こいつが入れそうな鞄を持っていたのは幸いだった。

ちなみにこの鞄はチャックで開閉する仕組みだ。今は少しだけチャックが空いているので、妖精モドキはそこから外の様子を覗いている。

「はい」

　妖精モドキの囁きが、辛うじて俺の耳に届く。うん。このくらいの音量なら、他の人には聞こえまい。

「それっぽそうなやつを見かけたら、俺がそいつの方にバッグを向けるからな。ちゃんと確認しろよ？」

「分かりました」

　鞄の中で、妖精モドキがコクンと頷いたのが分かる。

　こいつにファッション雑誌を見せたところ、似たような服装が見つかった。どうやら、見せてもらった写真と妖精モドキの話を統合するに、緑色のコートと、短めの黄色いスカートを身につけた感じらしい。実際はもっと派手なかんじだそうだ。全く、何が『ヒラヒラした感じ』だ。最初から『スカートを履いている』と言え。まぁ、そもそも『スカート』という物が冥府には無いのかもしれないが。

　ちなみに残念ながら、顔の作りとかについては新しい情報は無かったので、それについては妖精モドキの話を頼りにする他無い。服装の件について、若干あんな感じだったので、正直不安ではあるのだが。

「じゃあ、行くぞ」

「はい。お願いします」

　こうして俺達……いや、俺は、歩き始めた。